

「政治家としての使命」

財務副大臣兼復興副大臣

愛知 治郎



私の祖父である愛知揆一は、父が東北帝国大学理科大学の教授を務めた愛知敬一でありました（私の曾祖父にあたります）。敬一は、かのアインシュタインが来日した際に講演会で通訳を務めるなど親交が深い新進気鋭の学者でしたが、揆一が中学三年生の時に、急逝してしまいました。

その後、揆一は長男として兄弟の面倒をみながら、苦学して高校から大学へと進み、大蔵省に入省し、官僚として19年を過ごさせて頂きました。その後政治家に転身し、ご縁があって大蔵大臣として大蔵省に再度お世話になることとなりましたが、現職中に急逝し、大蔵大臣としてその人生を閉じることとなりました。

愛知揆一は、なぜ政治家に転身したのでしょうか。揆一は戦後に文書課長、官房長、銀行局長を歴任し、戦後の占領期にGHQとの交渉に実際に当たりましたが、日本の官僚であるにもかかわらずアメリカの意に沿った局長試験の受験を強要されるなど、占領行政に対する怒りを抑え得ませんでした。

その時、役人の立場ではGHQの言うことを聞くしかないが、政治家としてGHQとわたり合うことで、この国を少しでも良い方向に導かなければならないとの使命感を持ち、立候補の決断に至ったとのことでした。

官僚と政治家は役割が異なります。官僚の専門性、知見は非常にすぐれたものであり、国の行政を支えていることはまぎれもない事実であります。しかし、リーダーとしての政治家にしかできないことがあります。それは、決断すること、そしてその責任を取ることです。

その責任を取る覚悟のもとに政治家が決断することができて、初めて官僚の本当の力を引き出すことができます。

揆一は、官僚を長年務めたからこそ、その役割をわかっており、当時の時代背景から、政治家としての役割が自分に求められていたことがわかっていたのだと思います。

私は、この愛知揆一に小さい頃から憧れて、政治家を目指してきました。拙文ではあるが、私が小学校4年生の時に、国会議事堂の絵とともに書いた文章をひいてみたいと思います。

「ぼくのおじいさんは、このこっかいぎじどうで話し合い、いろいろなことをきめてせい治をゆたかにして、めぐまれない人がいたら生活をゆたかにしてあげていました。

そういうおじいさんをとてもそんけいしています。

だからぼくはおじいさんやおとうさんのあとをついでこっかいぎいんになりたいとおもいます。」

そのような私が、このたび、揆一にゆかりのある財務省で副大臣という重責を拝命することになり、人一倍、光栄に思っております。

就任当日に、歴代大蔵・財務大臣の写真が並んでいる講堂に出向き、揆一の写真の前で、全力を尽くす旨の誓いをしました。

財務副大臣としてレクを受ける中で、財務省では、若い大蔵省職員の励みになるように、研修において毎年度特に優秀な成績を修めた者に授与するために揆一が創設した「愛知賞」が今でも授与されていることを知りました。また、揆一が官僚として勤務していた際に保存していた「愛知文書」は、死後大蔵省に寄贈され、大蔵省財政史の編纂に大きく貢献したということも聞きました。

揆一が大蔵省で歩んだ足跡が、確かにこの財務省に残っていることを強く感じました。

これも何かのご縁だろうと思います。このご縁を本当に大切にさせて頂きたく存じます。

揆一は、責任を取る覚悟を持って、政治家に転身したのだと思います。

私も、政治家である以上、その覚悟はあるつもりです。

私は、自分に課せられた使命を自覚し、「国のために」という一心で、財務省の皆様とともに、微力ではありますが、全力をもって尽くしてまいりますので、よろしくお願いします。